

奈良文化財研究所 特別講演会「東京会場」

遷都1300年 今、よみがえる平城京

日時—2010年5月15日[土]

会場—江戸東京博物館1Fホール(東京都墨田区横綱1-4-1)

主催—独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所

後援—文化庁／読売新聞社／社団法人平城遷都1300年記念事業協会

13:00 主催者挨拶

13:10～13:30 平城宮跡のむかしと今

田辺征夫(奈良文化財研究所長)

13:30～14:20 大極殿復原

島田敏男(奈良文化財研究所文化遺産部建造物研究室長)

14:20～14:30 休憩

14:30～15:20 木簡が語る平城京の時代

馬場 基(奈良文化財研究所都城発掘調査部 主任研究員)

15:20～16:00 講演者にきく

田辺征夫・島田敏男・馬場 基

コーディネーター：柳林 修(読売新聞大阪本社 編集委員)

16:00～16:05 閉会挨拶



【お問い合わせ】 シンポジウム事務局(株式会社クバプロ内)
〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3-11-15 UEDAビル6F
TEL: 03-3238-1689 FAX: 03-3238-1837
E-MAIL: symposium@kuba.jp

<http://www.kuba.co.jp/nara1300/>



平城遷都
1300年祭
2010年開催

京式マスコットキャラクター—せんどうくん
©Heijō-kyō 1300th Anniv.



幕末以来150年間、平城宮跡の研究、調査、保存に携わったたくさんの先人の思いが結実した姿と考えると感慨もひとしおです。また個人的には、奈良国立文化財研究所に就職して間もなく自らも発掘に参加した大極殿が40年たって現実に復原される場に立ち会えるとは、信じられないと思います。

プロフィール

1944年三重県生まれ。

1968年3月慶應義塾大学卒業、69年6月京都大学大学院中退、69年7月奈良国立文化財研究所採用。81年4月奈良市教育委員会事務局文化財課長、90年5月文化庁美術工芸課主任文化財調査官、96年4月東京国立博物館考古課長、98年4月奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長、2001年4月独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所奈良宮跡発掘調査部長、03年4月同施設文化財センター長、05年4月独立行政法人文化財研究所理事・奈良文化財研究所長、07年4月独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所所長を経て、09年4月より現職。

専門は日本考古学。特に、古代都城、寺院などの研究。

編著書に『平城宮を掘る』(吉川弘文館)、『平城京 街とくらし』(東京堂出版)、『平城京 その歴史と文化』(小学館)などがある。



たなべ いくお
田辺 征夫

独立行政法人
国立文化財機構理事
奈良文化財研究所長

また、1300年祭の事業として、かつて大極殿を開いていた大極殿院回廊の範囲が解明されていますが、実際に大極殿院が開かれたと、その空間の壮大さをあらためて実感することができました。今後、復原が計画されている大極殿院回廊や門の完成を楽しみにしてください。平城宮にいられた際には、大極殿だけでなく、大極殿の前の壮大な空間を感じ取っていただきたいと思います。

皆さん！是非、奈良においでください。

そして、1300年前に、国の威風凛々をかけて、大極殿・平城宮・平城京、そして日本国の礎を建設した、当時の人々の心意気を感じていただければ何よりです。

プロフィール

1961年京都生まれ。

1985年京都工芸繊維大学大学院修了、86年奈良国立文化財研究所入所、99年文化庁文化財部建造物課(町並み保存担当)、2003年独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所都城発掘調査部遺構研究室長を経て、2009年より現職。

専門は日本建築史。特に、現存建物・発掘遺構・その他資料による、古代建築の具体的な形式・技法の復原について。文化財保存。建築・町並み・道路等の不動産文化財の保存について。



きくち はじめ
馬場 基

独立行政法人国立文化財
機構奈良文化財研究所
都城発掘調査部 主任研究員

奈良時代に、実際に大極殿造営工事に従事したたくさんの方がいて、その解体工事に従事したたくさんの方がいて、さらにお節介にもそれを発掘するひとがいて、今の大極殿が復原されました。

お節介一味の一人として、造営工事に奮闘したような人々の息吹をお伝えできればと思っています。

プロフィール

1972年東京都生まれ。

東京大学文学部卒。同大学院人文社会系研究科博士課程中退後、現職。専門は日本古代史。特に、木簡学等出土文字資料・都城史・寺院史、交通史・地方支配体制など。



しほだ としあき
島田 敏男

独立行政法人国立文化財
機構奈良文化財研究所
文化遺産部建造物研究室長

講演では、平城宮の現状の姿と、大極殿の復原検討の過程について説明します。設計図等がまったく残っていないなかで、どのような考えにもとづいて、大極殿を設計したかについて詳しく説明します。

これまで、だだっ広い野原のような公園というイメージで平城宮跡を見慣れた者にとって、1300年祭が始まり、連日多くの方々から平城宮跡が賑わっている様子は、新鮮な感動です。1300年祭の実行組織の方々やボランティアの方々のご苦労に敬意を表します。これが、一過性のものにならないよう、我々も努力していきたいと思っています。

道路に建物を復原することには賛否ありますが、設計検討段階で図面や模型やCGを見慣れ、工事中もしばしば工事過程を見ていた我々でさえ、実際に完成すると、その迫力に圧倒されました。やはり、実際の建物の持つ「力」は何ものにも代えがたいものがあると実感しました。

大極殿の建造過程



平城宮大極殿基壇 初重立柱
(2004.01.30撮影)



第一次大極殿基壇
(2003.01.09撮影)



第一次大極殿復原整備 初重尾垂木・小天井格子設置
(2005.03.21撮影)



第一次大極殿復原整備
初重野地板施工状況
(2005.12.13撮影)



第一次大極殿復原整備 二重軒天井施工状況
ホイス点検台より (2006.06.22撮影)



第一次大極殿復原整備 二重小屋垂木施工状況
ホイス点検台より (2006.10.30撮影)



平城遷都1300年で多くの人々が平城宮跡や奈良を訪れるのはうれしい。特に平城宮跡については、単なる原っぱと思う人も多くて認知度が低かったからだ。

平城宮跡が守られてきた歴史を知り、文化財を国民共有の財産として守り、伝える力になることを期待したい。ただ、大極殿などの復原事業をどう評価するか、悩ましい。市民に目に見える形で往時の建物を復原するのは「わかりやすい」点や遺跡の活用ではいいのだが、固定観念を植え付ける恐れもある。現に重層（二重屋根）で復原された朱雀門について、研究者の中には単層（一重屋根）だったとする見解も出ている。かつて美学者だった寺尾勇さんは「滅びの美学」を提唱した。何もない光景から往時を思い浮かべるのも素晴らしいと主張した。しかし、現実に戻ると南都の復興という点では、節度ある復興、復原も必要だろう。手を加えていいのはどこで、手を加えていけないのはどこかといったことを、将来的な南都の全体像の中で、景観面も加えて検討すべきではないだろうかと考えています。



やなぎばやし おさむ
柳林 修

読売新聞大阪本社 編集委員

プロフィール

1951年東京都生まれ。

関西大学文学部卒。1976年読売新聞大阪本社入社。奈良支局、松江支局長、文化部次長、編集局管理部長などを経て2006年12月から現職。

高松塚古墳、キトラ古墳、藤ノ木古墳（以上奈良県）や加茂岩倉遺跡（鳥取県）、鑑真和上の中国里帰りなどを取材する。

現在は、奈良の文化財や考古学、寺社など文化関係の取材を担当。「明日香村まるごと博物館フォーラム」、文化財保存修復「読売あをによし賞」、「薬師寺21世紀まほろば塾」なども手がける。



左上：基壇の高欄上に飾られた宝珠飾り 左下：内部と高御座
上：一重目詳細と二重目扇額